

## 東京国立博物館所蔵「土蜘蛛草紙」の研究

本多 康子 (学習院大学)

東京国立博物館所蔵の「土蜘蛛草紙」(以下、東博本)は、平安時代に活躍した源頼光とその家来・四天王の一人である渡辺綱による土蜘蛛退治を題材にした絵巻である。絵は土佐長隆、詞書は吉田兼好に仮託され、14世紀前半の成立と推定されている。東博本は、いわゆる頼光物のうち、土蜘蛛退治を主題とする作例の現存最古のものであり、他に例を見ない要素が含まれている。

たとえば、源頼光と渡辺綱が、土蜘蛛をはじめ異形の女怪・付喪神・踊る鬼と、次々に妖怪たちに遭遇していくエピソードは、東博本独自のものであり、それ以降の土蜘蛛退治の絵巻作例には全く踏襲されていない。また、頼光四天王のなかでも源頼光と渡辺綱を焦点化して描いていることも大きな特徴である。

本発表では、この東博本のみに見られる二つの特徴に注目し、それらを東博本の制作意図に還元して論じていきたい。

第一に、絵と詞書によって饒舌に語り出される妖怪たちに注目する。まず、①妖怪の性差に注目し、『白氏文集』『新楽府』等の漢籍に依拠していると指摘される皮膚の垂れ下がった老女や顔の大きな尼公といった異形の図像には、先行する地獄絵の女性表象の一端も見出せること。②付喪神を描く絵巻として、東博本は後世の「百鬼夜行絵巻」などに先行するものであり、器物や動物が妖怪と化す原初的なイメージが見取れること。③踊る赤鬼・青鬼については、とりわけ顔貌表現において、鬼神芸能における飛出面などの造形と関連性が認められることを指摘したい。すなわち、これらの妖怪の描写には、同時代の社会風潮や芸能など文化的社会的要素を具有するモチーフとしての機能が期待されているのである。

第二に、源頼光と渡辺綱が作品中において著しく抽出・特化して表わされていることに注目する。①源頼光と渡辺綱は共に源氏の出自であり、物語においてその二人を焦点化することにより、源氏尊崇が明確に示される。さらに、②妖怪という多様な文化的社会的象徴を退治する源頼光には、文化や社会そのものを掌握する者の姿が投影され、一方、③眉間尺譚の逸話を引出しつつ作戦を練り、頼光の身代わり人形を用いて妖怪を討伐する渡辺綱の姿には、奈良時代の隼人討伐を端緒とする人形芸能との関連性が窺われる。

以上のことから、東博本は、源氏の武者である源頼光と渡辺綱に王権守護の武威の具現者としてのイメージを与えるのみならず、彼らが新たな文化継承者として望ましい存在であることを表明していると考えられよう。